

佐賀市吉松町  
石名勝

53

Registered

3 153  
Владивостокъ.

Mr. Shimamura Esq



Saga  
Japan

405  
日本郵便





108  
23  
—  
2

From

S. Nabeshima  
Ladivostock

七年浦沿に海既防、昔以来最早二年に相試、其を以て其は実業上の活矣、  
件を以て研究、河、日、佐、煩、と、も、多、事、業、第、二、日、子、然、り、可、き、事、に、無、し、や、と、充  
分、注、意、致、し、所、も、吾、港、と、露、国、税、関、改、正、に、都、合、し、種、々、に、国、情、を、し、て、浦  
沿、港、を、以、て、日、露、貿、易、と、も、當、分、に、妥、何、事、に、見、込、も、相、立、中、き、を、其、

然、る、を、昨、春、未、少、を、以、て、專、心、吟、味、研、究、に、處、り、依、り、以、て、露、国、凡、綿、糸、も、日、本、を、  
製、造、せ、る、事、最、も、妙、なる、事、業、の、候、尤、も、卑、見、を、述、陳、せ、

露、国、の、生、産、品、中、の、更、紗、綿、糸、に、二、而、七、他、国、亦、と、同、く、越、に、劣、り、し、且、つ、優  
等、と、名、の、候、更、紗、と、身、十、軒、と、く、是、を、以、て、惜、き、綿、糸、と、露、西、亞、全、土、中、流  
以下、一、般、男、女、に、通、る、服、と、し、て、普、通、に、用、さ、る、迄、未、少、な、り、て、い、露、人、の、所、を、以、て、露  
国、の、在、國、上、に、日、本、人、も、男、女、を、も、下、衣、及、び、私、服、一、切、を、用、ひ、大、に、德、用、す、る、を、覓  
知、さ、る、に、至、り、且、夫、を、産、料、と、名、き、と、織、方、綿、柄、は、日、本、人、の、嗜、好、を、至、極、適、當  
し、普、通、英、国、凡、以、國、凡、と、異、な、る、日、本、服、用、と、し、て、一、種、の、嗜、味、を、有、さ、る、故、に、其、近、來

新嘉坡 年 月 日 在 汕 頭 商 店

日午

更紗と其の露国製綿糸の僅大に輸入あり一五以毛を使用したる者、其の價格甚  
通綿糸よりも法外高きもの係を大に是を愛顧せし、模様を以て將來おたて  
入増加せらるらん

斯の露国産綿糸は日本人の嗜好お返し徳用あり、其も均と甚昔より日本人の知  
りまを且つ需要増加せざる、一つは價格と高き為なり、露国産綿糸の價格は

並巾(三十五センチ)一露尺(三三寸)卸賣其十九丸、二十四丸乃至二十五丸賣相埒、三

丸乃至三十六丸にして大巾(三十八センチ)一露尺卸賣其三十丸乃至三十四丸賣相埒、三

丸乃至三十七丸と此も概米に英國産日本産を比し其毛心十丸乃至十五丸

高き割合なり、斯の如くするを以て露国産綿糸の特色を熟察せざる者、其因に

疎不れと云ふ者、を以て見れば、古より廉價あり、マンチエスター製を惜む、珍奇を

事高價なる露国産を輸入する者あり、其れ日本産に於ては、是を必要として、稀なり、

然も、其若し價格ふして日本人の購買力より過するを得、露国産綿糸の

需要も必然に増加し普通貯蓄を凌駕するに至る人然るも現今の通商製  
 造地も支那の府々輸入を不仕とし生産地の労働賃銀及び運輸費の高きゆめ  
 到底動至し其の價格に抵庸する能きなきを故に労働賃銀其の他諸賦ノ  
 皮き日本に於て西諸國に疎るるに製造せしむる必お結果を得る明なる概に身ノ原料  
 織造、振舞ひ等の製造法、教師、自ら見るときに、お説く、支那ナラば日本職工  
 を一とク一と研究せしむる直に得るを得敬て難事にあらずとも、

今や世人の未だ普くは注をせざる、時を留め、他賦ハ之に依り賃上げを露國凡疎  
 示ルに製造と始めに必要と擴め此下の一進者おとすことと、  
 未だの切き見布種は送沙を斯くおきは、和服用として最良ゆと有り此代價を  
 尙地を<sup>社</sup>看せられ、二因率夫を要し、  
 右製造のあり形に工場を新設す、金龍<sup>社</sup>通運の際、至難ノ事と見えども先年

中東海沿、頃者名方の河、尽力を、該部合社、送運の福成、  
 西の送運、<sup>社</sup>

明治三十二年四月廿五日 藤田商店

と云ふ所を周知せしむる事と有然と云ふ此處の斯業を始むる將來又厚  
 生會社の壯年斯業の経験より其の結果直しきことを以て此業の一鞭を加へるべき  
 諦念の製造と相併して前迄露國凡臨不の製造を始め此比較の甚く劣るを  
 功大々んと信し其本業の需要を増加し歩下の一を折れしむるに遠き將來  
 おあはせりすと云は

本意見と昨年十一月中に定むる日藤中日報記者より不慮の爲り且つ  
 本年一月初浦友会所りりたるもその府政不の製造會社コンシンシ友会に  
 支取人未とを以て高橋未考のりも有し再と成し其と今日未考近りは其の  
 此稿を終了するに務むるに業身計考を極し愁傷と失望を沈め扶  
 殊に事件の予きといはれんと氏を惜し傳述を其處を知りて此を重んずるを  
 轉に試合の場を扶今七曜に老考の賢考と成るの可しと云

切て露國凡臨不の對するを先と云はし一用し其後未考は其見の可しと云

明治 年 月 日 在 浦 商 店

申之斯ふ有様を以て或は今断然行はれ先名方の力を借り自らを平生  
 此具の他然るふは斯業を曾し断つるのみ一奮発しり云敷考す然し  
 他質をも夫より事情も有し事と有し何事然るは思ふ方身欲く実不  
 不尤も願ひ斯と自ら其任おきらんとす... 如何に思ふ有し得るも其  
 述し有し昨春未嘗自決せんノ是迄所授る日本人の支那人の柄合物持  
 抑抑等就しと云ふ所は自ら信をさふ有し其智識賢の以扶ゆと云ふ  
 責任を其野のため其の任務を試すを何事以熟考せざるを其是を思  
 得中を

其全交証紙 其後付た所は其必要以推測せざる以上

石丸勝一 氏

老名

新島 刻





力申姑実不秋傷之者有也 佐留実業界之女子研会  
之者有也 我々も此の備中書と其の方周を乞ふ可也  
今や黄泉之者と其の身口惜しむ也  
未子無人リ好月好日思家内留也 其の心付を可也

母の心

昭和二年五月二十日

石丸晴一殿

鉛筆刻 一丁